

病院小児病棟における保母職の導入 第3報 病棟内保母自身のとらえる保母の役割

窪田 英夫*・鈴木 裕子**

(平成8年9月30日受理)

A Study of Introduction to Care Taker Nurse for Pediatric Wards in Hospitals (3) The Role of Care Taker Nurses, Who is Understand by One Self in Pediatric Wards

Hideo KUBOTA and Yuko SUZUKI

(Received September 30, 1996)

1 はじめに

保育ニーズの多様化といった今日的現象によってさまざまな場における保育の提供とその充実が求められている。子どもの発達権と福祉権を保障する点からは、すべての場においてこの実現をはかる必要があろう。昨今ではエンゼルプランをはじめとする保育支援活動にもこれらの視点が反映され組織化され始めている。しかし、病棟内保育に関しては、派遣教師や派遣保母、あるいはボランティアといった形で補完されているのが現状で、しかも、多くは個人的努力に委ねられている。今後に向けては組織だった形で保母導入がはかられ、身体的疾患をもつ子ども達にも生活の充実と発達支援をはかる保育提供が求められる。

この実現を目指してこれまで我々は、まず現状を正しく理解するために病棟内における保育の有無をはじめ施設や設備といったハード面の実態や、子どもに関わる病棟内の人的環境を全国的な調査により把握した。この結果からは多くの小児医療施設で入院児の為に施設・設備に配慮していることがうかがえた。反面、保育に関してはその必要性は感受するものの、担い手としての保母の導入は困難であるといった施設側の意向を知りえた。(1994)そこで次に、病棟内における保母の必要性を明

らかにするため、すでに病棟内保育を行っている施設を対象に病棟内の保育環境及び保育の実際についての内容分析を行うとともに、保母の業務内容について検討した。その結果保育環境の充実をはかり、目標をたてて組織的に保育を展開している施設の多いことが明らかになるとともに、日常の業務内容についてもおおむね明らかにすることができた。ただし、保母本来の職務が遂行されているとは言い難い現状も理解された(1995)。

これらの実状をふまえ、今後チーム医療の中に保母職を確立するためには保母職の位置づけと役割についての意識的環境を確認しておくことが大切であろうと考えた。保母業務を拡充し、多様な保育ニーズに対応しながら、子どもの発達権や福祉権を保障し病棟内保育の一層の充実・発展をはかるためにもこの点を明らかにする必要がある。

そうした視点のもとで、保母本来の職務が発揮でき、専門職としての位置づけを確立する一助として現在は法的に明確にされていない病棟内保母に対し、保母自身にとらえる病棟内の位置づけ、子ども・母親、および周辺職種の保母職の受け止め方、あるいは保母が果たしている役割などについて明らかにすることを目的にアンケート調査を行い、その結果について検討したのでここに報告する。

2 方 法

前回の調査により病棟内保育を行っている84施設を対

* 小児医学第1研究室

** 保育学研究室

象に「保母の役割に関する調査票」を送付し、病棟に勤務する保育者に回答を求めた。その結果54施設より回答を得た（回収率64.3%）。有効回答数は117であった。

調査時期は1995年1月である。

調査内容は以下のとおりである。

病棟保母としての経験年数
 担当病棟
 対象児の年齢
 保母としての充実感
 病棟における保母の役割
 保母のかかわりによる子どもの変化
 病棟保母として大切なこと

3 結 果

1) 病棟保母の内訳

病棟保母の勤務状況は表1～3のとうりである。

表1 経験年数

年 数	人 数	%
1年	14	12.0
2年	19	16.2
3年	19	16.2
4年	10	8.5
5年	10	8.5
6年～9年	15	12.8
10年～13年	13	11.1
16年～19年	9	7.7
20年以上	8	6.8
合 計	117	100.0

経験年数を見ると、1年から32年まで幅広いものの、3年、2年、1年が多く、5年未満が全体の65.8%を占める。反面、20年以上の経験者も6.8%みられた。

表2 担当病棟

病 棟	人 数	%
新生・未熟児	16	13.7
小児内科	46	39.3
小児外科	11	9.4
混合（除新生児）	33	28.2
混合（含新生児）	10	8.5
その他	1	0.9
合 計	117	100.0

また、担当病棟（保母配置）は小児内科と混合病棟が多い。ただし、新生児・乳児病棟に13.7%認められる点は注目すべきである。

表3 保育対象

対 象	人 数	%
新生・未熟児のみ	10	8.5
新生児以上	13	11.1
乳児以上	72	61.5
幼児以上	21	17.9
学童のみ	1	0.9
合 計	117	100.0

さらに、保育の対象は乳児以上といった幅広い年齢の子ども達を対象にする場合が最も多いが、新生児・未熟児のみを対象に保育を行っている場合も8.5%とわずかながら認められた。

2) 保母としての充実感

保母としての充実感について、自由記述により回答された結果を分類したものが表4である。

表4 保母としての充実感

内 容	人 数	%	MA
児が精神的に安定する	73	62.4	
元気に退院する	41	35.0	
退院後の関わり	26	22.2	
成長・発達を認める	17	14.5	
児が生活を楽しむ	15	12.8	
感謝される	12	10.3	
病気について知る	8	6.8	
児が快方に向かう	6	5.1	
児の頑張る姿に接する	3	2.6	
親と信頼関係ができる	3	2.6	
治療がスムーズに運ぶ	2	1.7	
色々な家族と接する	2	1.7	
その他	10	8.5	
無記入	5	4.3	
N=117			

平均すると1.9項目の事柄をあげており、その内容は多岐にわたっている。内容からは子どもが精神的に安定した時に充実感を感じるという回答に代表されるように、入院中の子どもの安定に関することが多い。他方、健康を回復し退院するときや退院後の関わりに充実感を感じるといった病棟内保育特有の内容も多くみられる。さら

に、充実感は子どもとの関係に留まらず、家族との良好な関係の成立や、病気についての知識を得るといった保育者自身の成長等に関する点においてもわずかながら認められる。

3) 病棟内における保母の役割

病棟内における保母の役割について、自由記述で回答を求めた結果を母親や子ども、そして医師・看護婦といったそれぞれの対象との関わりによってとらえたものが表5である。

表5 保母の役割

		N=117	
対 象	役 割	人数	%
子 ど も	母親・ほか	32	27.4
	母親	29	24.8
	安心できる人	18	15.4
	遊び相手	18	15.4
	世話をする人	12	10.3
	指導者	4	3.4
	その他	3	2.6
	無記入	1	0.9
母 親	児の世話をする人	43	36.8
	母親の相談相手	43	36.8
	児の相手をする人	8	6.8
	母親のかわり	6	5.1
	児の支えになる人	5	4.3
	一番身近な人	4	3.4
	存在感がない	2	1.7
	その他	2	1.7
看 護 婦	無記入	4	3.4
	協力者	39	33.3
	児の生活の援助者	33	28.2
	便利な人	16	13.7
	専門家	11	9.4
	児とのパイプ役	6	5.1
	その他	4	3.4
	無記入	8	6.8
医 師	児の生活の援助者	33	28.2
	治療を手助けする人	21	17.9
	児の様子を伝える人	18	15.4
	児の精神的援助者	14	12.0
	子供の専門家	12	10.3
	存在が希薄	5	4.3
	その他	3	2.6
	無記入	11	9.4

関わる対象によりさまざまな役割が求められているといえる。子どもとの関係では母親的な役割を果たしているものが多く、母親との関係では子どもの養育者としての役割と、母親自身の精神的援助者としての役割を果たしている。また、看護婦・医師といった医療スタッフとの関係においては子どもの援助者であることが求められる一方、看護婦との関係で60%、医師では40%がそれぞれの職務の協力者としての役割を求めているようである。この傾向はことに看護婦と関係に強く認められる。

4) 子どもとの関わりで大切なこと

子どもとの関わりで大切にしていることを3項目あげてもらい、その結果を順位ごとに整理したものが表6である。

順位により幾分違いがあるものの、子どもへの愛情・やさしさといった保育者の資質に関する内容が顕著に多い。また、生活指導が二位以下で多くあげられ、全体としては資質に次いで多くあげられているのが興味深い。さらに、子ども理解、病識・病状の理解など、保育対象の把握や子どもとの受容信頼関係が多くあげられている点にも注目すべきであろう。

次に、一位にあげられている内容を病棟保母としての経験年数別によりとらえたものが表7である。

経験の少ない保育者は資質をはじめとする保育者自身に関する事柄を多くあげているが、経験を積むことにより保育の内容やあり方にウェイトをおいてとらえるようになる傾向がうかがえる。

また、担当病棟、対象児別では、いずれも新生児・未熟児担当の保母が保育者自身に関することをあげていることが顕著に多かった。

5) 保育的な関わりによる子どもの変化

乳児以上を担当する保育者の回答をもとに保母の関わりによる子どもの変化を、情緒の安定、保母への要求、家族への依存、保育参加、子ども同志の関わり、治療への取り組み、社会復帰の7領域に分け自己評定した結果を示したものが図1である。

概して評定結果は高い傾向を示しており、ことに保母要求・情緒の安定に保母の関わりの効果が大きいと理解している。反面、家族との関わりや治療への取り組みに関しては、他の領域に比べると評定が低い傾向にある。

また、経験年数・担当病棟・対象児別の評定結果についてみると、経験年数により異なることが理解できる。

表6 大切なこと

N=117

	1 位		2 位		3 位		計
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数
保育者の資質（愛情）	53	45.3	27	23.1	17	14.5	97
受容信頼関係	17	14.5	12	10.3	7	6.0	36
子どもの理解	8	6.8	18	15.4	12	10.3	38
保育的配慮（安全）	9	7.7	3	2.6	6	5.1	18
病識・病状理解	7	6.0	11	9.4	8	6.8	26
保育の充実	6	5.1	4	3.4	12	10.3	22
コミュニケーション	3	2.6	7	6.0	6	5.1	16
生活の指導（厳しさ）	4	3.4	22	18.8	17	14.5	43
家族との関わり	1	0.9	2	1.7	6	5.1	9
精神的支え	1	0.9	3	2.6	5	4.3	9
体力・健康	0	0.0	1	0.9	6	5.1	7
スキンシップ	7	6.0	2	1.7	2	1.7	11
その他	0	0.0	2	1.7	5	4.3	7
無記入	1	0.9	3	2.6	8	6.8	12

表7 経験年数別内容分類

	保育者に関すること		関わりに関すること		保育に関すること	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%
～2年	18	56.3	9	28.1	5	15.6
～10年	26	44.1	15	25.4	18	30.5
10年以上	9	36.0	5	20.0	11	44.0
合 計	53	45.7	29	25.0	34	29.3

考 察

病棟母の勤務年数をみると5年以下の保育者が多いが、これは近年になって病棟内保育への関心が高まりその必要性が理解され、導入が進められてきている状況を反映しているといえよう。ただし、最長経験者が32年であり、20年以上の経験者も8人（6.8%）認められた点からは、かなり早い時期から母導の必要性を理解し対応していた病棟があることが理解できる。

また、担当病棟の多くは内科及び混合病棟であるが、これは慢性疾患を初めとする比較的長期の入院児が多いといった病棟の特徴によるものであらうと考えられる。

さらに、保育の対象の多くは乳児以上の異年齢の子ども達である。それぞれの子どもにおける入院という危機的な状況を理解し、身体的条件と共に個々の発達や興味・関心に対応していかなければならないといった困難な現状がうかがえる。この点は将来的にも病棟内保育の課題といえよう。

一方、注目すべき点として、わずかながらも新生児・未熟児を担当する母母の存在が認められることがあげら

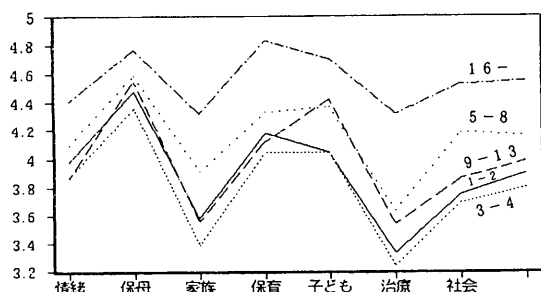


図1 経験年数別評定

つまり、経験16年以上の保育者は、いずれの領域においても保母の関わり効果が大きいと考えている。保母要求を除く側面にこの傾向が強く、ことに、家族との関係・治療意欲において顕著に認められる。

れる。これは、出生初期からの保育的な関わりが、情緒的な側面を始め、子どもの発達を促すといった点に着目した取り組みとして大いに評価できよう。

次に、保母としての充実感についてみると、保母は様々な局面で充実感を感じていることが理解できる。現状の医療体制の中では、保母は独自の存在としては明確に位置づけられておらず、不安定な立場で機能している。このような状況の中でもそれぞれに充実感を感じているようである。内容を見ると子どもの安定に関するものが多く、前報の保育目標との関連がうかがえる。病棟における保育の目標は、精神的な面も含め入院中の生活の充実をはかるといった事柄が多くあげられていた(1995)。身体的疾患を持ち、しかも家庭といった日常性と異なる場で生活していることに配慮した関わりを展開していくことで児の安定がはかられ、頭初の目標が達成されることで保母に充実感をもたらすのであろう。この意味では、充実感は目標の達成度であるともいえよう。

一方、退院時または退院後の健康を取り戻した子どもの姿に接することで充実感を感じることも多く、この際の充実感は視点を子どもに転じることでもたらされるものと考えられ、まさに共感的な内容を含むものである。子どもの健康を快復した達成感が共感をとうして保母の充実感に反映されるのであろう。共感を生む為には、入院中の子どもとの良好な関係が前提となるが、この点については子どもとの関わりの結果で示されたとうり、愛情・優しさ・受容的態度といった資質に支えられ、両者間に信頼関係が構築されているのは容易に推察できる。共感による充実感は入院中の関わりの質に関係があることは否めない。このような点からも、子どもの安定をめざし、健康の快復を願って充実した生活の援助をしている保育者の様子がうかがえる。

反面、僅かながら人から感謝される・病気について知るといった回答に見られるように、保母自身に還元される内容や自己の成長に関わる事柄で充実感を感じることも認められる。充実感は他者の承認ないしは自己の欲求の充足といった一面をもつことが理解される。

また、病棟内の役割についてみると、保母の一般的な役割は理解していても、病棟内保母職の地位が確立していない現在、病棟保母としての役割は関わる相手が期待する内容を察知し理解されていると考えられる。つまり、関わる相手との関係で役割が規定されてくるといっても過言ではなく、関わる相手が求める役割を果たしている

段階であるといえよう。つまり、役割をとらえることは集団内における保母の位置づけを理解することでもある。この点でとらえると、保母に対して、子どもや母親が求める役割と、医療スタッフの求める役割では隔たりが大きく、保母の位置づけは不明確であると言わざるをえない。ことに、看護婦との職務分担が不明瞭である点(1995 吳)がこの傾向を一層助長していると推察できる。

まず、子どもや母親との関係では、共に養護を中心に保母本来の職務による役割が果たされ、存在の独自性が求められていると考えられる。保育対象となる子ども達の多くが乳幼児であり、健康上の問題を抱えている点では養護的・精神的援助者としての役割が要求されよう。また、母親からは相談相手としての役割を求められる割合が高く、入院による不安を高めている家族を支援していく必要性がうかがえる。この意味では保母は専門職としての立場で母親や子どもの要求に答え、その役割を果たしていることが理解できる。ただし、子どもは母親であることを保育者に求めるが、母親は自分と保母を同一視した見方はしていない。この点が母子に関わるときの保母の役割の複雑さをはらんでいると推察される。病棟での子どもの成長・発達および生活の充実に向けては子どもに関わる人々が連携をとってすすめていく必要がある。相互信頼関係にもとづく協力・支援関係を成立させることが必要であり、その中核として保母が機能してることが求められ実践されている様子がうかがえる。

反面、看護婦及び医師といった医療スタッフとの関係では、保母は子どもの援助者としての役割をもつ存在であると共に、それぞれの職務の援助者としての役割が求められている点に注目する必要がある。ことに看護婦との関係においてこの傾向が顕著である。本来的には異なる役割を果たす存在ではあるが、現状では看護婦と保母の業務内容が明確にされておらず、生命保障を主たる業務とする医療スタッフに、子どもの保育つまりは発達保障を主たる業務とする保母の役割についての理解を求める必要性が痛感される。本来の役割分担による協力関係の確立がはかられてこそチーム医療として十分に機能するものと思われるが、現状では医師や看護婦との間に、子どもや母親との関係で認められたような専門性を生かした役割が果たされておらず、これが病棟内における保母の存在を一層不安定にしているといえる。治療が本来的な目的の場であり医療が優先することは当然であるが、乳幼児の年齢では入院の目的を明確に理解するのは困難

であり、むしろ慣れない環境の中で不安と恐怖が強いのではないと思われる。母親不在の入院生活であることを考慮すれば、子どもが安心して病棟の生活を送ることができるように、援助する人が必要であろう。子どもの心と生活の安定がひいては治療意欲を引き出し高めていくのではないかと考える。そのためにも医療関係者とは性質を異にする、痛いことをしない、気持ちを共感してもらえといった子ども達が信頼を寄せ、頼れる存在が求められる。その役割を果たすのが保母であろうと考える。そして、そこに病棟内の保母の位置づけが見出される。「子どもとの関わり」や「保母の充実感」のところで述べているように、子どもの安定と健康の回復を目指した保育姿勢が理解され、医療スタッフ間で保母の役割及び職務内容についての共通理解がはかれることを期待したい。入院中も子どもは成長・発達を遂げており、そのための援助が求められる。乳幼児の心とからだ・成長・発達を理解し、発達援助を主たる職務とする保母の本来的な役割に応じた活用が求められる。

ただし、保母職を確立するためには、医療側の理解や努力だけに留まらず、保母の医療・保健に関する教育の充実が求められる点は養成側の問題としてあげられる。今後それぞれの領域において相互的に取り組む必要性が実感される。

さらに、子どもとの関わりで大切にしていることの結果では、保育は技術よりまず人柄が求められるとも言われる点が確認できるように、愛情・思いやり等を含む資質が顕著に多くあげられている。保育は人と人との関わりで成立し、良好な関係の構築が必要であることを考えれば、不安定な状態にいる子どもをありのままに受けとめる姿勢がまず求められる。この点が保育者の資質が多くとらえられた背景であろう。情緒的交流を基礎に病棟内の生活を展開している様子が理解できる。一方、生活指導といった指導的な側面もとらえている点は見逃せないことである。情緒的安定をはかる関わりを展開しながら、生活の自立といった乳幼児期の発達課題をとらえた関わりを展開しているところに専門職としての自覚や役割意識がうかがえる。さらに、受容信頼関係や子どもの理解、そして病棟内保育の特徴的な内容として病状の理解等に関することも多くあげられている。保育は個別的理解が基盤であり、しかも関係性が大切であることを反映した結果と言えよう。

また、一位にあげられた事柄に注目してみると、保育

経験の長い保母は保育の内容も重視する傾向がうかがえ、保育者の教育的な役割をより自覚し行動している様子が見える。経験により、保育の機能面に着目するようになると考えられる。つまり、関わりによる子どもの変化にもみられるように、経験の長い保育者の方が保育参加や社会復帰の評定結果が高いことを考慮すれば、経験者の増加が今後の病棟内保育の質を高めていくと期待できる。

また、担当病棟や対象児との関係からは、それぞれの子ども達の特性を把握した関わりを提供していることがうかがえる。

最後に、関わりによる子どもの変化を見ると、評定の高い項目に子どもとの関わりで大切にしている内容が反映され、情緒的側面についての評定が高い。つまり、関わりの大切さであげられた資質や保母の受容的な態度が子どもの情緒の安定をはかり、その関係を基盤として保母要求、保育参加、子ども同士の関係に向け、子どもの行動を動機づけ、生活を活性化させるといった循環の成立をうかがい知ることができる。また、比較的評定が低い治療への取り組みについては医療的な側面の内容を含むため、保母は間接的支援であることが関係しているとも考えらる。また、家族との関わりについては対象児のほとんどが乳幼児である点を考えれば、発達のみにて家族との分離不安をぬぐい去ることは困難であることによると考えられる。ただし、これらの領域に関する評定が低いとは言っても全体的には高水準であると言う点には留意する必要がある。

次に、評定結果で差がみられた経験年数との関係を見ると、経験の長い保母は多くの領域で最も評定が高い。つまり、多くの子どもとの関わり経験を積むことが子どもへの関わりの質を高め保育効果を高めていると考えられる。また、子どもとの関わりで大切にしていることの内容に見られたように、情緒的な側面を支える保母としての資質とあわせて、教育的側面も含めた保育的関わりを展開している保母が多いことも、保育効果を高める一因になったと考えられる。経験豊かな保母は子どものニーズを的確に汲みとり、子どもの心の安定や意欲を引き出し生活のさまざまな側面に配慮した援助行動をとっていると推察できる。

終わりに

以上、それぞれの項目について考察をすすめてきたが、

病棟内保育においては、おおむね情緒的な関係を基盤に保育本来の養護と教育といった両面からのアプローチをおこなっている様子が理解できた。また、経験を重ねることにより、その傾向が助長されると推察できる。併せて、心理的援助に関する内容が回答の多くを占め、入院児の保育においてはまずこの点への配慮が必要であることを認識していることも理解できた。さらに、今回は自己評価による結果であることを考慮する必要はあるが、経験年数が保育の専門性を意識した病棟内保育及び子どものとらえ方を可能にし、保育効果を高めることがうかがえ、経験者の増加が今後の病棟内保育の質を高めるものと期待できる。ただし、今後病棟で十分に機能していくためには保母の専門性を理解した病棟内での位置づけを明確にし、病棟スタッフの理解と保母の教育と言った両面からの取り組みを開始し、本来的な協力関係の構築が課題となろう。

現状においても保母は子どもの生活面や精神面の安定に貢献しているが、チーム医療としての保母の機能を十分に活用することが子どもにより充実した生活を提供することになる。充実した環境のもとで病棟内関係者や母親、そして子どもとの間に良好な関係を成立させ、それぞれの専門性を生かした関わりを展開していくことが子どもの生活や発達を一層保障していくことになるであろう。病棟内の円滑な人的環境が子どもに作用し、ひいては治療効果を高めるといった望ましい循環も期待できる。この要となるのが保育者であろう。生活や発達援助の役割と人的ネットワークの調整を担う保母の必要性は今後ますます求められていくといえよう。そして、今日的視点である保育サービスならびに家族支援の点からも病棟内保育の必要性は高まっていくことが予想される。子どもの発達、教育、福祉の充実のため、早期の病棟内保母導入と保育の充実を求めたい。

今回は保母の立場からとらえた病棟内保母の現状を報告したが、今後は他のスタッフや子ども、そして母親といったそれぞれの立場における保母のとらえ方、および専門的な立場での保母のチーム医療への参加をめざして検討していきたい。

謝 辞

本研究の実施に当たっては共同研究者として東京都立母子保健院・帆足英一、東京慈恵会医科大学・呉太善、東京都小児科医会・牛山充、淑徳短期大学・帆足暁子、東京家政大学・大学院博士課程・北側公美子の諸氏等の協力を得た。また、病棟内保母の方々の協力を得たことを深く感謝する。

文 献

- 帆足英一他：小児の療養環境のあり方に関する研究
厚生省平成5年度心身障害研究・研究報告書（1994）
- 帆足英一他：病棟内保母職の実態と効用に関する研究
平成6年度厚生省心身障害研究・報告書（1995）
- 窪田英夫他：病院小児病棟における保母職の導入に関する研究(1) 東京家政大学研究紀要第35集（1995）
- 窪田英夫他：病院小児病棟における保母職の導入に関する研究(2) 東京家政大学研究紀要第36集（1996）
- 栗田佳江他：小児病棟における保母の有用性
第41回日本小児保健学会講演集（1994）
- 呉 太善他：全国調査からみた病棟保母の職務内容と課題 第42回日本小児保健学会講演集（1995）
- 光野佳代他：病棟保母業務活性化の試みとその評価
第43回日本小児保健学会講演集（1996）
- 中村崇江他：病院における病児保育へのかかわり
第43回日本小児保健学会講演集（1996）